

告布達沿革概畧

編纂 近藤圭造

上

CZ
5
0243

部

類

號六〇四四

書

031096-001-8

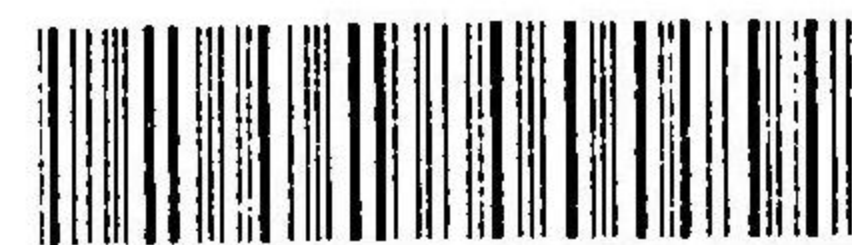
CZ-5-0243

布告布達沿革概略

近藤 圭造 / 編

M9

BBC-0723



特39

665

布告布達沿革概畧

目次

上卷

總則

訴訟

勸解

外國

出訴

喚向

訴訟

下卷

貸預

貸下

金穀

自第

一至

至第四十一

至第六十六

至第七十一

至第七十三

至第八十四

至第九十五

至第九十九

自第六十五

自第六十六

自第七十一

自第七十三

自第八十四

自第九十五

自第九十九

一丁

二十四丁

四十一丁

四十五丁

四十九丁

五十五丁

五十七丁

一丁

布告布達沿革概畧

二册

近藤圭造編纂

東京

汎愛堂發兌



東京市立図書館蔵

布告布達沿革概畧

目次

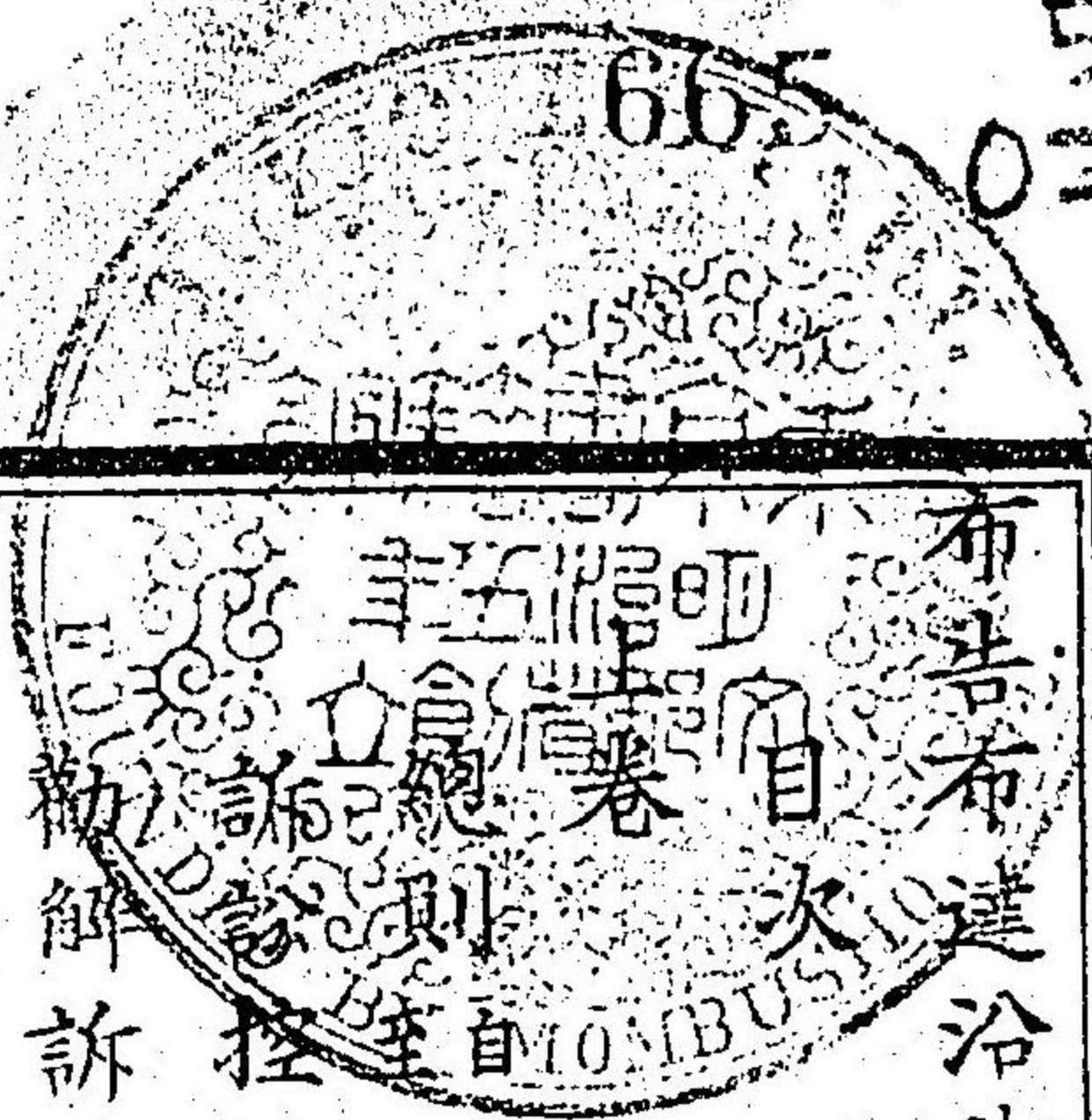
〇目次

特39

CZ

665

5
0243



布告布達沿革概畧

近藤圭造編纂

布告布達沿革概畧

三册

東京

汎愛堂發兌



明治九年圖書局發行

下卷	訴訟入費	喚向	出訴期限	外國詞訟	勸解	訴訟	總則	布告
貸預貸下ヶ金穀	至自第第九十五	至自第八十一	至自第七十八	至自第七十七	至自第七十七	至自第七十六	至自第六十六	至自第六十五
至自第七一								
一丁	五十七丁	五十五丁	四十九丁	四十五丁	四十一丁	二十四丁	一丁	

布告布達沿革概畧

〇目次

動産不動産質入書入 自第八至第二十三

利息 自第二十四至第三十

身代限並受人証人 自第三十一至第四十八

賣買 自第四十九至第六十三

契約并會社 自第六十四至第七十四

代人 自第七十五至第八十七

訴訟用罰紙規則 自八十八至九十六

○追加諸件

○增補 遺失物取扱規則

二丁

十八丁

二十丁

三十五丁

三十六丁

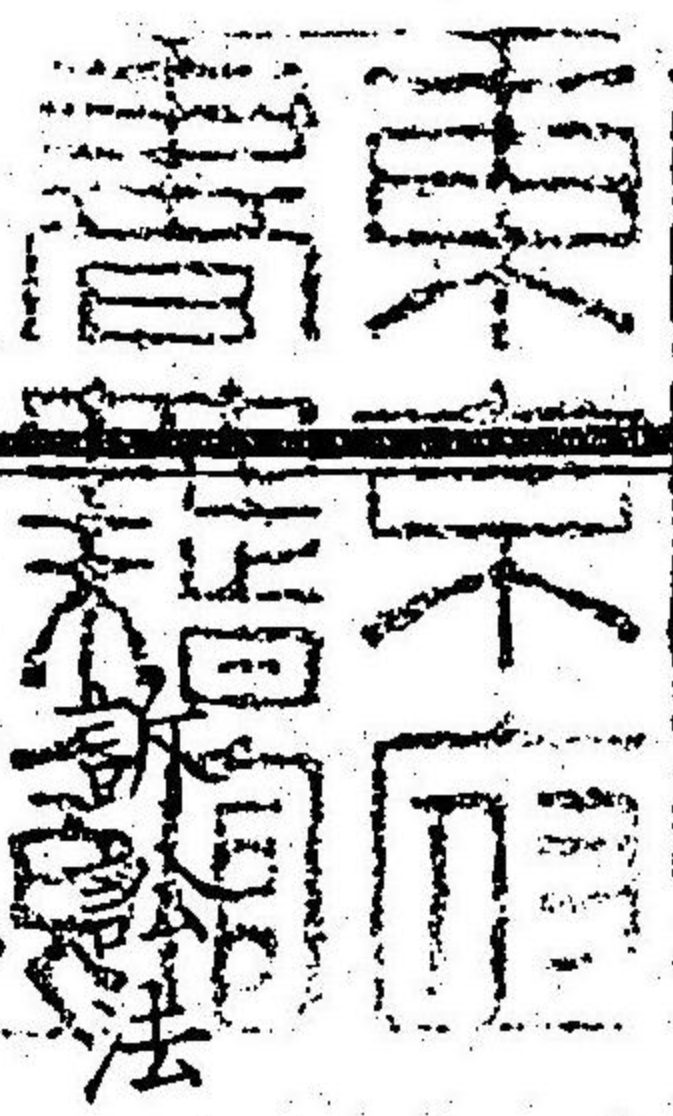
四十七丁

五十八丁

六十四丁

六十八丁

布告布達沿革概略卷一



明治四年辛未六月廿二日御達

府藩縣交涉准判規程改正

府藩縣管轄交渉ノ訴訟准判規程今般詮議ノ上別紙ノ

通御改正相成候此旨更ニ相違候事

改正 府藩縣交涉訴訟准判規程

第一條 凡訴訟ヲ准判スルハ其本人ニ限ルベシ若シ

疾病老幼或ハ癡疾等ニテ親族其他ノ代人ヲ以テセ

ンテ請フ片ハ事實ヲ純訊シ止ヲ得ザレバ其請ヲ

三河 近藤圭造 編

許モ妨ナシ

第二條 凡訴訟士族卒ハ支配頭平民ハ名主年寄ノ奥印ヲ押スベシ奥印ナキハ之ヲ准理スヘカラズ但支配頭名主年寄等若シ其情實ヲ壅塞スルアラハ奥印ナシト雖モ准理冤枉ナキヲ要ス

第三條 治下ノ士民他ノ管内ノ者ト紛議ヲ生ジ其裁判ヲ請フ片ハ親シク其情實證據ヲ推糺審明シ條理正當ナレハ副書ヲ作り廳印ヲ押シ訟者ニアタヘ差添人ト共ニ答者ノ管廳ニ送り其裁判ヲ受シムベシ
第四條 他管廳ノ副書ヲ以テ我が裁判ヲ請フモノアラハ先ツ其訴狀ヲ按シ訟者ヲ推問シ原情ヲ得ル片ハ答者並ニ差添人ヲ呼出シ右訴訟ノ件十日ヲ限リ

答書セシムベシ奥印ノ如キハ第二條ニ準ス最モ中元歳終ノ兩季ニ迄ヅク片ハ必ス十日ヲ限ラシテ可ナリ

但日限中若訴答者對談熟議シ共ニ内濟ヲ請フアラバ双方ノ連署狀ヲ出サシメ其請ヲ許ス旨ヲ訟者ノ管轄ニ復スベシ尤對談熟議ノタメ日限猶豫ヲ請フ片ハ五日乃至十日ノ延期ヲ許ス可シ

第五條 一事件ニシテ訟者數名ニ涉リ官廳各異ナル片ハ證書ニ連署セル首名ノ管廳ニテ推糺シ答者ノ管廳へ送達スベシ

但答者數名ニ涉リ其管廳ヲ異ニスルモ亦本條ニ准ズバシ

第六條 訴訟斷決スル片ハ双方連署ノ受書ヲ出サシメ永ク異論ナキヲ證セシメ其書ノ寫ヲ訟者ノ管廳ニ送達スベシ

但訴答突合ノ後對談熟議シ共ニ内濟ヲ請モノアラハ第四條但書ニ准スベシ

第七條 聽訟初日ヨリ百日ヨリ事理盤錯兩情乘戾シテ決シ難キハ其糾問ノ始末審ニ記載シ之ヲ訴答ノ者ニ示シ謬違ナキヲ証印セシメ且廳印ヲ押シテ訴答ノ者ニ授付シ民部省ニ出シテ裁斷ヲ受ケシムベシ尤其始末ヲ記載シ訟者ノ管廳ニ達ス可シ
但金穀其他貸借ノ訴訟ハ解訟ヲ度トナシ限ルニ百日ヲ以テスベカラズ

第八條 民部省ニ出シテ裁斷ヲ乞フ事ヲ訴答ノ者ニ達シテ後十五日ヲ以テ發途ノ期トナス若シ其期ヲ遲緩セハ越度タルベキ旨ヲ示スベシ尤訴答者ノ内郷里其廳ト遠隔シ往復調度ノ事ニ付十五日ニシテ發途シ難キ者ハ相當ノ日限猶豫スベシ

但發途後ト雖凡對談熟議シ内濟ヲ請フ者ハ第四條ノ如クシテ之ヲ許スベシ

第九條 百日ニ至ラザルモ訴答者ノ内其裁判ニ服セス民部省ノ聽訟ヲ請フアラハ其始末ヲ記載シテ民部省へ出スベシ

第十條 隄防用惡水及ヒ村市山林等境界彼我管轄交牙ノ地ニ關涉ノ訴訟ハ訟者ノ管廳ヲ主ト為シ訴狀

ニ其廳印ヲ押シ關涉ノ廳ニ達スベシ關涉ノ廳ハ答者並ニ差添人ヲ出シテ答書ヲ作ラシメ狀情證據ヲ糾明シ其廳屬ヲ副テ訟者ノ管廳ニ送り聽訟ノ庭ニ蒞マシメ與ニ地圖ヲ檢査シ契券ヲ照準シ簿冊ヲ檢閱シ或ハ實地ニ就テ協議審判スヘシ其裁決ニ至リテハ都テ斷案ヲ作り民部省ヘ伺出ベシ

但訴狀ヲ受ルヨリ答書ヲ送ルノ間尋常十日ヲ以テ期トス然レモ尚査按ヲ加フヘキ事件ハ此期ヲ必トスヘカラス

第十一條 境界論地ハ詳裁審斷シ必ス對談熟議ヲ許スヘカラス隄防用悪水ハ實地水路ヲ檢査シ彼我害ナキハ宜シク説諭ヲ加ヘ熟議解訟セシムベシ

第十二條 田畑山林等ノ地所ニ關係スル訴訟ハ總テ其管轄ノ廳ニ於テ裁決ス故ニ訟者田畑山林ト共ニ我管内ノ者ナレハ第十條ノ如クシテ他ノ答書ヲ召シ廳屬副スル訟者我管内ノ者ニシテ田畑山林他ノ管轄ナルキハ第三條ノ如クシテ答者ノ管廳ニ遣シ裁判ヲ受シムヘシ熟談等ハ前ニ掲ル條々ノ如シ

第十三條 遠國ノ者滯留スル地ノ士民ト爭論ヲ生シ直チニ其地ノ廳裁ヲ請フ者ハ猿宿主人又ハ其地親族ノ者差添訴出ルキハ准理裁判シ且斷決ノ上其始末ヲ記載シ訟者ノ管廳ニ達スヘシ但百日ニ及ヒ斷決ニ至ラサル片ハ之ヲ訟者ノ管廳ニ達シ民部省ニ出スベシ

第十四條 管内滞留スル兩個ノ旅人警ハ長崎箱館ノ者東京ニ滞在スル如シ紛議ヲ起シ其地ノ旅宿或ハ親族ヲ證人トシテ

直チニ其裁判ヲ請フ片ハ前條ノ如シ

第十五條 訴訟中訴答者ノ内死スル片ハ其狀ヲ審按

シ差添人ノ證書ヲ取り其管轄廳ニ達スベシ
同四年辛未九月晦日司法省布達 管轄違ヒノ訴訟

他府縣廳へ關涉訴訟ハ訴人本管廳ノ添翰ヲ以テ當省へ可申出事

但人民ノ互訴訟ハ准判規定ノ通可心得事

第三 同五年壬申七月三日 司法省第一號達 裁判請証文ノ式

斷獄聽訟共裁判請証文ノ式是迄士族平民打交候事件士族以上ハ請書ト唱へ證文ヲ別紙ニ致シ申付來候處

自今右等ノ無差別一紙證文ヲ以テ請ケ申付候様可致事

第四 同五年壬申八月十日 司法省第六號達 民事訴訟答杖ヲ禁ス

聽訟ノ儀ハ人民ノ權利ヲ伸ヘシムル為メニ其曲直ヲ斷スルノ設ニ候得ハ愈懇説篤諭シテ能其情ヲ盡サシムベキノ處右事務ヲ斷獄ト混同シ訴訟原被入へ答杖ヲ加ヘ候向モ有之哉ニ相聞甚以無謂次第ニ付自今右様ノ儀無之様厚注意可致事

第五 同五年壬申十一月十日 司法省第三十三號布達 戸長等裁判聽問

向後戸長並ニ副戸長共願ノ上各裁判所へ差入聽聞差許候事

第六 同六年一月 司法省決議 腰掛張出シ

腰掛張出案

訴訟斷獄等ニ付罷出候モノ着服ノ規則

士族以上

一羽織袴着用尤袴ノミニテモ不苦事

但洋服相用候儀勝手タルベクトシテ並兩具製ノ服

ハ不相成事

平民

一羽織袴着用又ハ兩様ノ内一方而已ニテモ不苦事

但洋服相用候儀ハ勝手タルベクトシテ並兩具製ノ

服ハ不相成事

第七

同六年四月十五日
司法省第五十六号達
府縣ノ答辨書等ノ式
各府縣廳ニ對シ各人民ヨリ裁判所ニ訴出候節各府縣

ノ答辨書並其裁判所ニ付各府縣ハ達書式別紙ノ通相
定候條此段相達候事

第八

同六年六月十四日
第百二十三号御達
府縣達シノ日限
各府縣ハ諸布告到達ノ日限別紙表面之通被定候條本

年第六十八号ノ布告ニ因リ到達之上三十日間揭示ノ
後ハ管下一般ニ之ヲ知り得タル事ト看做候條此旨相
達候事

但途中川支等ニテ停滯シタル時ハ其事由可届出事

布達ノ日ヨリ
到着ノ日朝
里程

○府縣名

翌日東京府○三日神奈川縣○四日新沼縣埼玉縣入間
縣足柄縣木更津縣印幡縣椽木縣宇都宮縣○五日茨城
縣群馬縣濱松縣靜岡縣山梨縣○六日三重縣愛知縣岐

阜縣長野縣福島縣磐前縣○八日兵庫縣奈良縣堺縣滋
賀縣筑摩縣宮城縣度會縣若松縣山形縣置賜縣京都府
大坂府○九日水澤縣新川縣飾磨縣和歌山縣○十日岩
手縣酒田縣秋田縣敦賀縣相川縣石川縣豐岡縣北條縣
岡山縣名東縣○十一日新潟縣鳥取縣小田縣廣島縣○
十二日青森縣島根縣愛媛縣高知縣小倉縣○十四日長
崎縣濱田縣山口縣福岡縣三潯縣佐賀縣○十五日大分
縣白川縣○十七日鹿兒島縣○廿一日宮崎縣

但二十四時間ヲ以一日ト爲ス可シ

第九

同六年十一月廿七日
司法省第百八十五号達

裁判言渡シ式

從來聽訟上裁判申渡ノ儀ハ請証文爲差出候處今般右
請証文相廢シ別紙ノ通改正候條此旨可相心得事

第一條 各裁判所及ヒ地方官ニテ裁判ヲ爲ス片ハ役

前ノ請証文ヲ申付ル法ヲ廢シ然シテ裁判言渡書ノ
寫ニ裁判廳ノ印ヲ押シ之ヲ原告被告ニ下付シ原告
被告ヲシテ其裁判言渡書ノ寫ヲ受取タル證書ヲ出
サシムヘシ

但地所境界論ニテ測量繪圖ノ裏ニ裁判ノ旨趣ヲ
記載シ原被告ニ下付シタル片ハ原告被告ヲシテ
裁判裏書ノ繪圖ヲ受取タル證書ヲ出サシムルヘ
シ

第二條 各裁判所及ヒ地方官ヨリ下付シタル裁判言
渡書ノ寫又ハ裏書ノ繪圖ヲ受取ス不服ヲ唱へ上告
ヲ願フ片ハ其裁判言渡書ノ寫及ビ訴訟ニ付テノ書

類ヲ添へ不服ノ者ヲ司法省裁判所へ差出スベシ

第十 同六年十一月廿七日司法省達 詞訟ノ時限

詞訟等臨時至急ノ事ニ關ヒザルハ都テ十二時ヨリ三時迄ニ可差出事

但至急ノ儀ハ此限ニ非ス尤赤紙ヲ附ケ可申事

諸判事擔當民事ノ裁判ニ於テ其疑ナキ者ハ課長ノ決

ヲ取ニ不及事

十一 同七年二月十三日司法省達 檢事章程司法警察

檢事職制章程及司法警察規則御改定ニ付今後右ニ照

シ事務可取扱此旨相達候事 章程之

十二 同七年四月十四日 第百四十八号御達 布告ノ揭示

布告揭示ノ儀ニ付明治六年二月第六十八号六月二百

四号二百十三号ヲ以テ相達候處詮議ノ次第有之總テ

取消自今布告達共該地到達ノ翌日ヨリ管轄内へ觸示

マデ騰寫刊刷等ヲ日數ノ二十日ト定メ其翌日ヨリ三

十日ヲ過レハ一般ノ人民之ヲ知り得タルト見做シ

候條右日數中ニ人民周知候様各地方便宜ノ方法ヲ設

ケ施行可致此旨相達候事

但到達日限ノ儀ハ従前ノ通タルヘキ事

十三 同七年五月二十日 司法省甲第九号達 裁判所取締

今般裁判所取締規則左ノ通相定候條此旨相達候事

裁判所取締規則

第一條 訟庭ハ訴訟口誥必ス出席シ詞訟人ヲ順次ニ

呼込ミ裁判官ノ命ニ從ヒ失敬又ハ鬧キノラアラザ

ル様其取締ヲナスベキ事

第二條 原被告人ヲ始メ代言人等總テ訟庭ニ出ル者ハ呼込ノ次第ニ隨ヒ沉默整列シ裁判官出席スレハ各々起テ禮ヲナスベシ

第三條 原被等共其事情ヲ餘蓋ナク幾回モ詳細ニ陳述スベシト雖モ互ニ先ツ發言スル者ノ言終リタル後ニ非サレバ更ニ其言ヲ發スベカラズ

第四條 凡進退動作ハ輕躁ニ涉ラス言語ハ憤怒高激ニ涉ラズ諄々トシテ其事情ヲ陳述シ且裁判官ニ對シテ尊敬ヲ致スニ注意スベシ

第五條 前條ニ記載シタルヲ守ラス裁判官ニ對シ尊敬ヲ欠クモノアル片ハ裁判官直ニ譴責ヲ加フベ

シ以下七年十月八日司法省甲第十九号改正

但代言人此ヲ犯シ譴責ヲ受ケシトキハ其事件ニ付代言人タルヲ得ス

第六條 譴責ヲ加フ可キモノアルトキハ其裁判ヲ中止シ犯則ニ關係ナキモノハ一旦扣所ニ退カシメ然ル後犯則ノ者ヲ譴責スヘシ

第七條 裁判官ヲ罵ルモノアル片ハ前條ノ如ク其裁判ヲ中止シ之ヲ斷獄課ニ付シ本律ヲ科ス可キ事但代言人此ヲ犯スモノハ本律ヲ科スルノ後三月ヨリ多カラザルノ時間代言人トナリテ裁判所ハ出ルヲ得ズ

第八條 裁判ノ時公廳ヲ許サレタル者ハ人々皆沉默

敬聽スヘシ

但裁判官審問ノ際公廳ノ者若シ紛鬧ニシテ審問ノ妨碍アリト思量スルキハ便宜ヲ以テ訴訟口誥ニ命シ公聽ノ者ヲ退カシム可シ

十四

同七年八月二十七日
司法省第二十号達

終審裁判ノ執行ト

司法省裁判所ニ於テ原被告人ハ終審ノ裁判申渡シ右裁判通り執行トノ事ニ付同裁判所ヨリ本人ヲ管轄スル地ノ裁判所ニ其旨相達シタル片原被告人ノ内歸府又ハ歸縣ノ後右裁判ニ付故障ヲ申立テ裁判通り執行ハザル者有之ニ於テハ其裁判所ニ於テ終審ノ裁判申渡書ノ通り執行致シ候様處分及フヘク此段相達候事但裁判所設置ナキ地方ニテハ地方官ニ於テ本文ノ

通り處分可及候事

十五

同七年十二月二十日
司法省甲第廿一号達

裁判所取締中改正

裁判所取締規則第九條左ノ通改正候條此旨相達候事第九條 刻限呼出ヲ受タル者疾病又ハ無據事故アリテ遲參又ハ不參スル片ハ其事實ヲ明細ニ記載シタル届書ヲ呼出刻限前裁判所ニ差出ス可シ若シ刻限後届出ル數又ハ無届ニテ遲參不參ヲ致ス者ハ斷獄課ニ廻シ違式輕重ニ問ヒ相當ノ罰金ヲ科ス可キ事

十六

同八年二月廿二日
第三十号御布告

民事ノ傍聽

民事訴訟審判ノ儀人民一般傍聽差許候條此旨布告候事

但男女ノ間ニ起リシ風儀ニ關スル訴訟ハ此限アラ

ス

十七 同八年四月十四日 第五十九号御布告 左右院等ノ廢置

左右院被廢候事

元老院大審院被置候事

式部寮自今宮内省へ被附候事

右布告候事

十八 同八年五月四日 第七十三号御布告 判事等ノ廢置

正權大中少判事及ビ解部ヲ廢シ判事判事補左ノ通被

置候條此旨布告候事略之

十九 同八年五月廿四日 第八十号御布告 大審院諸裁判所ノ章程

今般大審院諸裁判所職制章程別冊ノ通被定候條此旨
布告候事

大審院

職制章程

諸裁判所

大審院職制

長 一人

一等判事ヲ以テ之ニ充ツ

第一 本院判事ノ長トシ各課長ヲ命シ事務ヲ分付シ

隨時各庭ニ臨ミ重要事件ヲ聽理シ及ヒ司法卿ト往

復スルヲ掌ル

第二 合員會議ノ議長トシ判事審論ニ歧ニ分ルモ

ノハ多數ニ決シ兩議平分スルモノハ自ラ之ヲ決ス

ルヲ掌ル

判事

第一 民事刑事ノ上告ヲ判理シ裁判ノ不法ナル者ヲ破毀シ及ヒ國事犯内外交渉ノ事件重大ナルモノ並ニ判事ノ犯罪ヲ審判スルヲ掌ル

第二 死罪ノ案ヲ審閱スルヲ掌ル

第三 法律ノ疑條ヲ辨明スルヲ掌ル

屬

事ヲ判事ニ受ケ上抄シ及簿書ヲ掌ル

大審院章程

第一條 大審院ハ民事刑事ノ上告ヲ受ケ上等裁判所以下ノ審判ノ不法ナル者ヲ破毀メ全國法憲ノ統一ヲ主持スルノ所トス

第二條 審判ノ不法ナル者ヲ破毀スルノ後他ノ裁判所ニ移メ之ヲ審判セシム又便宜ニ大審院自ラ之ヲ審判スルヲ得

第三條 已ニ他ノ裁判所ニ移メ之ヲ審判セシムルノ後其裁判所亦大審院ノ旨ニ循ハザル時ハ大審院更ニ自ラ之ヲ審判ス此ノ時ハ本院判事合員會議メ判決スベシ

第四條 陸海軍裁判所ノ裁判權限ヲ越ユル者ハ其ノ裁判ヲ破毀メ之ヲ當然ノ裁判所ニ付ス

第五條 各判事ノ犯罪其ノ違警犯ヲ除クノ外大審院之ヲ審判ス

第六條 國事犯ノ重大ナル者及内外交渉民刑事事件ノ

大審院章程

第一

大審院章程

第一

重大ナル者ヲ審判ス

第七條 各上等裁判所ヨリ送呈スル所ノ死罪案ヲ審
閱シ批可シテ送還ス其否トスルモノハ合員會議シ
更ニ律ヲ擬メ還付ス

第八條 大審院ノ審判ハ判事五人以上庭ニ列ス五人
庭ニ列セザレバ審判スルコトヲ得ス

第九條 法律疑條アレバ大審院之ヲ辨明ス

第十條 法律闕失アル者ハ補正ノ意見ヲ具ヘ司法卿
ヲ經由シテ上奏スルコトヲ得

第十一條 大審院判決録ヲ編纂シ上告ヲ破毀シ疑條
ヲ辨明シタル者ハ逐項記載シ其議決ノ原由ヲ叙録
シ之ヲ司法省ヘ送致シ刊行セシム

第十二條 課ヲ設ケ務メヲ分ツコト左ノ如シ

第一 民事課

第二 刑事課

上等裁判所

職制

長 一員 勅任判事ヲ以テ之ニ充ツ

第一 控訴事件ヲ各課ニ分付シ各課長ヲ命シ隨時各
庭ニ臨ミ重要ノ事件ヲ聽理シ及司法卿大審院長ト
往復スルコトヲ掌ル

第二 管内巡廻裁判ノ便宜ヲ料理スルコトヲ掌ル
判事

第一 管内ノ控訴ヲ受ケ之ヲ覆審スルコトヲ掌トル

第二 管内府縣ヲ巡廻シテ各處死罪ノ獄ヲ裁判スル

ルヲ掌ル 巡廻規則
後ニ具フ

判事補

第一 事ヲ判事ニ受ケ控訴下調ヲ掌ル

第二 判事ニ從ヒ巡廻裁判ノ列ニ充ツ

屬

職掌大審院屬ニ同ジ

上等裁判所章程

第一條 上等裁判所ヲ東京大坂長崎福島ノ四所ニ置

キ府縣裁判所ノ裁判ニ服セスノ控訴スル者ヲ覆審

各府管表
別ニ具フ

第二條 死罪ヲ裁スルハ上等裁判所ノ權任トス各上

等裁判所ノ判事及判事補合セテ二人ヲ派出シ管内

巡廻メ裁ヲ行フ

第三條 死罪ヲ審訊シテ律ヲ擬スルノ後大審院ニ案

ヲ具ヘ批可ヲ得テ然ル後ニ決行ス

第四條 各府縣裁判所ヨリ送呈スル所ノ終身懲役罪

案ヲ審批ス

第五條 管下代言人代書人ノ違律ヲ裁決ス

第六條 民刑ヲ論セズ公庭ヲ開クニ判事三人坐ニ列

スルヲ要ス

第七條 上等裁判所ノ裁判ニ承服セストイヘ凡更ニ

控訴スルヲ得ス唯々大審院ニ上告メ破毀ヲ求ム

ルヲ得

巡迴裁判規則

- 第一 巡迴裁判ハ各上等裁判所ヨリ管下府縣へ派出シ府縣裁判所ノ權外ナル死罪ノ獄ヲ斷ス
- 第二 凡ソ巡迴裁判ノ各地方ニ至ルハ一年二次ヲ以テ定則トス但シ非常ノ事件ハ此例ニアラス
- 第三 所長ハ巡迴ノ緩急ヲ詳ニシ或ハ輪流ノ法定メ司法卿ニ稟請シテ之ヲ派遣ス
- 第四 府縣裁判所ニ於テ罪犯ヲ下調ヘシテ其証憑ヲ得其死罪ニ擬スルモノハ案ヲ具ヘテ巡迴ノ至ルヲ俟ツ
- 第五 各上等裁判所管下ノ廣狹ニ因リ二道若クハ三道ニ分チ各道ニ裁判官二員判事一員 補一員ヲ派ス

- 第六 各府縣ノ判事巡迴裁判ノ訟庭ニ列席シテ巡迴裁判官ト共ニ三員ノ定數ニ充ソベシ
- 第七 已ニ結審シテ巡迴判事ヨリ審案ヲ大審院ニ送呈シ大審院批可ノ府縣裁判所ニ下シ決行セシム
- 第八 巡迴裁判官ノ各府縣ニ滞留スルハ豫メ日數ヲ限ラス該府縣重罪ノ多少ニ從フ

職制

府縣裁判所
 判事長一人 自五等至七等
 司法卿大審院長上等裁判所長下往復ス他ハ判事ニ同シ
 判事

民事ヲ初審シ刑事懲役以下ヲ審判スルヲ掌ル
判事補

事ヲ判事ニ交ケ便宜判事ノ欠ニ填ツ
屬

職掌上等裁判所屬ニ同シ

府縣裁判所章程

第一條 各府縣 一ノ裁判所ヲ置キ一切ノ民事及刑事
懲役以下ヲ審判ス但シ別ニ裁判所ヲ置サルノ縣ハ地
方官判事ヲ兼任ス

第二條 府縣裁判所ニ於テ審判シタル民事ハ輕重トナ
ク皆初審トス初審ハ之ヲ上等審判所ニ控訴スルヲ
得

第三條 民刑事ノ内外ニ交渉シタル者ハ其輕キハ直
チニ之ヲ裁決シ其重キハ一面之ヲ聽理シ一面之ヲ
司法卿ニ具申スヘシ

第四條 死罪ハ文案證憑ヲ具ヘ被告人ヲ勾置シ以巡
迴判事ヲ待ツ

第五條 終身懲役ハ擬律案ヲ具ヘテ上等裁判所ノ審
批ヲ取り然ル後ニ決行

判事職制通則

第一條 大審院以下府縣裁判所ニ至ル迄判事ヲ置ク
一等判事ヨリ七等判事ニ至ル上等裁判所以下判事
補ヲ置ク一級判事補八等ヨリ四級判事補ニ至ル

第二條 大審院ノ訟庭ハ一庭ニ判事五人以上其中壹

人ヲ課長トス上等裁判所ニ於テハ判事共數ニ足ラザル時ニ判事補ヲ以テ坐ニ列スルコトヲ得但シ補ニ人ニ至ルコトヲ得

第三條 喚召審訊及歇止ヲ命スル皆該庭課長ノ專任タリ

第四條 課長ヲ命スルハ該所判事長ノ權任トス

第五條 民事刑事庭ヲ分テ聽理ス其ノ事簡ナル者ハ一庭ヲ以テ日時ヲ分テ聽理ス判事民刑二課ヲ分テ務ヲ治メ或ハ民刑二課ヲ通兼スルコト各々其便ニ從フ民刑課ヲ分ツノ時ト云凡裁判官在庭ノ數定員ニ充タサル時ハ互ニ相填補スルコトヲ得

第六條 已ニ審訊シ裁決セントスル時ハ裁判官其ノ

庭ヲ退キ議事シテ多數ニ就クニ三人ナレハ二人ノ説人以上ノ議平分ノ歸一セサル時ハ三人ニノ説ハ三説ニ就ク均ク一説ヲ持スルカ如シ課長ノ見ル所ヲ以テ之ヲ決ス

第七條 大審院長及各上等裁判所ノ判事長ハ隨時各

庭ニ臨ミ民刑ヲ課長ノ事ヲ行フコトヲ得此ノ時ハ課長判事該庭ニ上席セシ者避ケテ通常裁判官ノ列ニ就ク

第八條 重罪及犯情繁難ナル者ハ下調ヲ行フ下調ハ別庭ニ於テ戸ヲ鎖シ裁判官書記ヲ引テ之ヲ行フ下調訖リ罪案成テ始テ公庭ニ付ス下調ヲ行ヒシ裁判官ハ該案公庭ノ班ニ列セス

第九條 已ニ公庭ニ付スルノ後犯跡未タ明ラカナラ

又証憑揃具ハラス而メ情狀疑フヘキ者ハ課長ヨリ
更ニ他ノ裁判官ヲメ下調ヲ行ハシム

二十 同八年五月廿四日 第九十二号 御布告 上等裁判所ヲ置カル

今般東京大坂長崎福岡四ヶ所へ上等裁判所ヲ被置分
轄左ノ通被定候條此旨布告候事

東京上等裁判所

東京府 神奈川縣 埼玉縣 千葉縣 足柄縣 茨城縣

熊谷縣 椽木縣 山梨縣 静岡縣 濱松縣 愛知縣

岐阜縣 長野縣 筑摩縣 新潟縣 相川縣 新川縣

大坂上等裁判所

大坂府 京都府 敦賀縣 滋賀縣 石川縣 三重縣

度會縣 奈良縣 和歌山縣 堺縣 兵庫縣 飾磨縣

岡山縣 北條縣 鳥取縣 豐岡縣 名東縣 高知縣

愛媛縣 小田縣 島根縣 濱田縣 廣島縣 山口縣

福島上等裁判所

福島縣 磐前縣 若松縣 置賜縣 水澤縣 酒田縣

山形縣 宮城縣 岩手縣 秋田縣 青森縣

北海道 但函館裁判所管轄内

長崎上等裁判所

長崎縣 小倉縣 福岡縣 佐賀縣 大分縣 三潯縣

白川縣 宮崎縣 鹿兒島縣

二十一 同八年六月八日 第九十三号 御布告 裁判事務心得

今般裁判事務心得左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 各裁判所ハ民事刑事共法律ニ從ヒ遲滞ナク

裁判スヘシ疑難アルヲ以テ裁判ヲ中止シテ上等ナル裁判所ニ伺出ルヲ得ス但シ刑事死罪終身懲役ハ此例ニアラス

第二條 凡ソ裁判ニ服セザル旨申立ル者アル時ハ其裁判所ニテ辨解ヲ爲スヘカラス定規ニ依リ期限内ニ控訴若クハ上告スヘキヲ言渡スヘシ

第三條 民事ノ裁判ニ成文ノ法律ナキモノハ習慣ニ依リ習慣ナキモノハ條理ヲ推考シテ裁判スヘシ

第四條 裁判官ノ裁判シタル言渡ヲ以テ將來ニ例行スル一般ノ定規トスルヲ得ス

第五條 頒布セル布告布達ヲ除クノ外諸官省隨時事ニ就テノ指令ハ將來裁判所ノ準據スヘキ一般ノ定

規トスルヲ得ス

二十二

同八年六月廿二日 選卒ノ等級
第百九号御達

選卒ノ儀自今等外吏ニ準シ取扱候條此旨相達候事

二十三

同八年六月廿八日 讒謗律
第百十号御布告

讒謗律別冊之通被定候條此旨布告候事

讒謗律

第一條 凡ソ事實ノ有無ヲ論セス人ノ榮譽ヲ害スヘキノ行事ヲ擡發公布スル者之ヲ讒毀トス人ノ行事ヲ擧ルニ非スノ惡名ヲ以テ人ニ加ヘ公布スル者之ヲ誹謗トス著作文若クハ畫圖肖像ヲ用ヒ展觀シ若クハ發賣シ若クハ貼示ノ人ヲ讒毀シ若クハ誹謗スル者ハ下ノ條別ニ從テ罪ヲ科ス

第二條 第一條ノ所為ヲ以テ乘輿ヲ犯スニ渉ル者ハ

禁獄三月以上三年以下罰金五十圓以上千圓以下罪

科セ科シ或ハ偏ヘニ一
罰ヲ科ス以下之ニ做ス

第三條 皇族ヲ犯スニ渉ル者ハ禁獄十五日以上二年

半以下罰金十五圓以上七百圓以下

第四條 官吏ノ職務ニ關シ讒毀スル者ハ禁獄十日以

上二年以下罰金十圓以上五百圓以下誹謗スル者ハ

禁獄五日以上一年以下罰金五圓以上三百圓以下

第五條 華士族平民ニ對スルヲ論セス讒毀スル者ハ

禁獄七日以上一年半以下罰金五圓以上三百圓以下

誹謗スル者ハ罰金三圓以上百圓以下

第六條 法ニ依リ檢官若クハ法官ニ向テ罪犯ヲ告發

シ若クハ証スル者ハ第一條ノ例ニアラス其ノ故造
誣告シタル者ハ誣告律ニ依ル

第七條 若シ讒毀ヲ受ルノ事刑法ニ觸ル、者檢官ヨ

リ其事ヲ糾治スルカ若クハ讒毀スル者ヨリ檢官若

クハ法官ニ告發シタル時ハ讒毀ノ罪ヲ治ムルヲ

中止シ以テ事案ノ決ヲ俟テ其被告人罪ニ坐スル時

ハ讒毀ノ罪ヲ論セズ

若シ事刑法ニ觸レスノ單ヘニ人ノ榮譽ヲ害スル者

ハ讒毀スルノ後官ニ告發スト雖モ仍ホ讒毀ノ罪ヲ

治ム

第八條 凡ソ讒毀誹謗ノ第四條第五條ニ係ル者ハ被

害ノ官民自ラ告ルヲ待テ乃チ論ス

二十四

同八年六月二十九日律例ノ増加
第百十三号御布告

改定律例第四條左ノ通増加候條此旨布告候事

第四條増加

凡上告シテ破毀ヲ得タル罪犯其懲役ノ年日數ハ原裁
判言渡ノ日ヨリ起算シ獄舎勾置若クハ便宜監護ノ日
數懲役限内ニ算入ス勾置監護ノ日數本罪ニ過ル者ハ
直ニ赦免ス其上告ノ不當ナル者ハ裁判言渡ヨリ上告
ニ至ル迄ノ時間及ヒ勾置監護ノ日數ヲ限内ニ算入ス
ルヲ得ス若シ檢事ノ上告ニ係レハ不當ナル者ト雖
モ仍ホ限内ニ算入ス

二十五

同八年七月十四日
司法省第十七号達書 懲役人ノ目數計算

本年第百十三号改定律例第四條増加御布告ニ付上告

セザル者懲役ノ年日數計算ノ儀正院ハ相伺候處左ノ
通御朱書相成候條為心得此旨相達候事 畧ス

廿六

同八年八月十二日
第百廿七号御布告 福島上等裁判所移轉

福島上等裁判所宮城ニ被移候條此旨布告候事

但管轄ノ儀ハ従前ノ通

廿七

同八年八月十四日
司法省第廿号達書 裁判官烟草ヲ止ム

裁判官ノ輩白洲上取調ノ節烟草ヲ用ヒ候儀不相成候

條此旨相達候事

廿八

同八年九月五日
第百廿七号御布告 改定律例中削除

改定律例第二百九十一條刪除候條此旨布告候事

廿九

同八年九月九日
司法省第廿四号達書 大審院章程中ノ心得

大審院章程第九條之儀ハ上告ヲ受ケタル上之レヲ破

毀シ法律ノ疑條ヲ辨明シテ他ノ裁判所ヘ示スヲ言
フモノニシテ法律ノ伺ヲ解明スルトハ全ク別ナリト
ス依テ法律ノ條件ニ付テ解シ難キ儀有之ニ於テハ當
省ヘ可伺出候條此旨相達候事

三十

同八年九月十八日 律例心附キノ建言
司法省第九号達書

聽訟ニ關カル法律ノ既ニ制定シタル條件及ヒ未夕制
定セサル條件ニ付其ノ闕漏ヲ裨補シ或ハ速カニ新法
制定ヲ要スル者ハ實際ノ得失並ニ緩急ノ適度ヲ斟酌
商量シテ漸次正院ヘ建議致ス可キニ付心付ノ事件之
ニアルニ於テハ詳細書面ヲ以本省ヘ具申致ス可ク候
條此旨相達候事

卅一

同八年十月二十日 裁判所長官ノ印
司法省第十号達書

各裁判所々長官印彫刻ノ儀從今官費ニ取計尤轉免等
ノ節ハ其時々返納候様可致此旨相達候事

三十二

同八年十二月廿七日 吟味願ヒ
司法省第四十七号達書

吟味願取扱等ノ儀ニ付昨明治七年十月四日各府縣裁
判所ヘ相達候儀モ有之候處自今吟味願之儀ハ警察官
ニ於テ取扱可致此旨相達候事

卅三

同九年一月十二日 賣淫取締リ
第壹号御布告

改定律例第貳百六十七條私娼街賣條例相廢シ賣淫取
締懲罰ノ儀ハ警視廳并各地方官ヘ被任候條此旨布告
候事

卅四

同九年一月二日 官ニ對スル訴訟
司法省

人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟ニ付明治七年第二

十四號ヲ以相違置候所右ハ行政司法ノ裁判權限ニ於テ猶混淆ヲ免カレザル儀モ有之候ニ付追テ御規則相立候迄右ニ關スル訴訟ハ總テ本省へ伺出指令濟ノ上受理可致候此旨相違候事

卅五

同九年一月廿三日
內務省乙第九号達

賣淫取締リ

本年第一号ヲ以改定律例第二百六十七條廢シノ儀御布告相成候ニ付テハ過料三十圓以內懲戒六ヶ月以內適宜ノ方法ヲ設ケ賣淫取締一層行届候様處分可致此旨相違候事

卅六

同九年一月卅一日
第八号御布告

上告

凡ソ上告期限內ニ檢事及罪犯ヨリ上告セスシテ司法卿其裁判ヲ不當ナリトスル事アル時ハ期限ニ拘ハラ

ス大審院檢事ヲシテ上告セシムル事ヲ得ベシ此旨布告候事

卅七

同九年二月十九日
司法省第廿二号達

勅奏官ノ不服罪

本年達第十七号ヲ以勅奏官及華族違式註違ノ犯罪ニ付呼出方ノ儀相違候處右ハ違註條例ヲ犯シ伏罪不致等ヲ以警察官ヨリ送致相成候件ニ限リ候儀ト可相心得為念此旨相違候事

卅八

同九年二月廿四日
司法省第廿七号達

手續書等ノ用字

民事訴訟裁判ニ付手續並ニ口書判決文等裁判所ニ於テ書記スル書類ハ今後其文中ニ於テ本年本月本日同年同月同日昨年去月昨日翌年翌日等ノ文字ヲ用ユ可ラス縱令再三重出ニ至ルモ必ス年号何年何月何日ト

正明ニ記載致ス可キ事ニ相定候條此旨相達候事

此九 同九年二月廿八日改定律例中ノ廢置

第三百二條ヲ刪除候條此旨布告候事

懲役人又犯罪條例

凡懲役終身ノ囚人又百日以下ノ罪ヲ犯ス者ハ第五條ニ照シテ捧鎖ヲ科シ一年以上ノ罪ヲ犯ス者ハ四日以上七日以下ノ捧鎖五年以上ノ罪ヲ犯ス者ハ八日以上十日以下ノ捧鎖ヲ科ス懲役終身ノ罪ヲ犯ス者ハ絞

懲役人逃條例

凡懲役終身ノ囚人逃走スル者ハ捧鎖三日再ヒ逃走スル者ハ絞

凡懲役終身ノ囚人逃走シ外ニ在テ又罪ヲ犯ス者ハ懲役人又犯罪條内懲役終身ノ囚人又罪ヲ犯スノ例ニ照シテ科斷ス

四十 同九年二月二十七日罪犯ノ拘留日限

各區裁判所若クハ支廳ニ於テ罪犯拘留ノ際其拘留期限ハ可成丈ケ其與ヘラレタル刑事權限懲役三十日以下或ハ百日以下ニ超過セザル様注意スヘク此旨相達候事

○訴訟控訴上告

四十一 同五年十一月廿八日司法省ハ控訴

地方官及ヒ戸長等御布告布達ニ悖リ規則ヲ立或ハ處置ヲ爲シ又ハ願伺届等ニ付壅閉シ又ハ移住ヲ抑制シ亦ハ御布告布達ヲ隣縣揭示ヨリ十日ヲ過テモ布達セ

ス又ハ御布告布達ヲ誤解ノ其旨ニ悖リ又ハ地方等ノ
裁判ニ服セザル者ハ司法裁判所へ訴訟苦シカラスト
達アリ

四十二

同六年二月十四日
司法省第十七号達 公布必ス揭示スベシ

御布告布達ハ地方裁判所前裁判所ナキハ縣廳前並戸
長宅前へ文字無遺漏揭示イタスヘキ達アリ

四十三

同六年二月十五日
司法省第三十三号達 控訴ノ添翰

五年四十六号云々ニ付司法裁判所へ訴訟致スニ付其
地方官ニ於テ添翰ヲ三日間渡サツレハ直ニ出願苦シ
カラスト達アリ

四十四

同六年五月十五日
第百六十二号御布告 夫婦離別ノ訴訟

夫婦ノ際己ムヲ得ザルノ事故アリテ其婦離縁ヲ請フ

ト雖モ夫之ヲ肯ンセス之カ為メ數年ノ久ヲ經テ終ニ
嫁期ヲ失ヒ人民自由ノ權利ヲ妨害スルモノ不少自今
右様ノ事件於有之ハ婦ノ父兄弟或ハ親戚ノ内附添直
ニ裁判所へ訴出不苦事

四十五

同六年七月十七日
第二百四十七号御布告 訴答文例並附録

今般訴答文例並附録別冊ノ通被相定候ニ付来ル九月
一日ヨリ原被告人共訴答文式都テ此例ニ照準可致此
旨布告候事 文例並附録別冊通
行本アリ今略記ス

第一卷 原告人ノ訴狀

第一章 原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第二章 訴狀ヲ作ルハ代書人ヲ用ル事

第三章 訴狀ノ定則ノ事

第四章 訴狀ノ書式ノ事○貸附米金等淹滞○預ケ
米金淹滞○賣掛代金淹滞○手附金賣買違約○受
負料淹滞○奉公人違約○專賣免許ヲ犯シタル訴
狀○商社中取引○夫妻離別○養子女ヲ離別○家
督相續○田畑山林等賣買違約○經界ヲ争フ○控
告

第五章 一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止ル可キ事

第六章 一冊ノ訴狀ニノ二件以上ヲ合スヲ得ル事

第七章 原告人連名ノ訴狀

第八章 連名ノ被告ヲ訴フ

第九章 讓證文ヲ以テ訴フ

第十章 代言人ノ事九年

第二卷 被告人ノ答書

第一章 答書ノ定則

第二章 代書人ヲ用フル事

第三章 原告人ノ返リ證文ヲ所有シタル答書

第四章 原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書

第五章 原告人證書ヲ偽造シタル答書

第六章 經界ヲ争フ答書

第七章 既ニ訴ヘラレタル事件ニホタ訴ヘザル事

件ヲ接續スル事

第八章 對決前熟議解訟ヲ爲シタル答書

第九章 對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書

第十章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ

約シテ解訟ヲ爲シタル答書

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代價延期ノ約

定ヲ爲シタル答書

四十六

同六年八月十六日 越訴廢セラル

訴訟律内越訴條廢止候條此旨布告候事

但各裁判所及ヒ地方官ノ裁判ニ服セザル事アリテ
上告セントスル者ハ司法省布達壬申四十六號本年九
三号ノ通可相心得事

四十七

同六年八月十日 豫審中ノ控訴取上ケズ

各人民ニテ地方裁判所及ヒ地方官ノ裁判ヲ受ケ未ダ
裁判言渡シテ受ザル内ニ司法省裁判所へ訴訟スルモ
ノ有之趣右ハ追テ訴訟法御定可相成候得共言渡無之

内ハ服スルト服セサルトノ分界モ無之等ニ付豫審中
ノ控訴ハ以來一切不取上様可相心得候條此旨相達候

事 同九月三日
取消シ

四十

同六年九月七日 訴答文例附録中改正

訴答文例附録中訴狀宛所其御裁判所ト有之處毎號ト
モ同第十八号書式ノ通り相定候條此旨更ニ布告候事

四十九

同六年十二月十五日 控訴

壬申第四十六号ヲ以各裁判所並ニ各地方ノ裁判ニ服
セザル者ハ司法省裁判所へ訴訟苦シカラサル旨及布
達置候處司法省裁判所ノ裁判ニ服セザル者ハ他ニ控
訴ノ道無之ニ付今後司法省ニ於テ臨時局ヲ開キ覆審
ニ及ビ候間司法省裁判所ノ裁判ニ服セザル者ハ司法

省へ訴訟不苦尤モ司法省裁判所ハ大判事ノ名宛ニテ
差出司法省ハ司法卿ノ名宛ニテ差出スヘク候條此旨
布達候事

五十

同六年十二月五日
司法省第二百三十三号達
前條追加增加

當省第九十八號布達但書左之通增加候條此旨相達
候事

但各裁判所並各地方官之裁判ニ服セザル者ハ司法
省裁判所へ上告スルニ止マリ司法省裁判所ノ裁判
ニ服セサル者ハ司法省臨時裁判所へ上告スルニ止
マリ候儀ト可相心得候事

五十一

同七年五月十九日
第五十四号御布告
控訴略則

今般民事控訴略則左ノ通相定候條此旨布告候事

民事控訴略則 民事控訴トハ刑事ノ外總テ權利ノ妨
害ヲ受シ者訴出其裁判ニ服セスシテ
上等ノ裁判所へ
訴フルヲ云フ

第一條 凡民事ニ付原告被告ノ内府縣裁判所或ハ裁
判所_在ラザル縣廳ノ裁判ニ服セザル者ハ司法省裁
判所ニ控訴スルヲ得可キ事

第二條 司法省裁判ニテ始テ受タル裁判ハ之レヲ臨
時裁判所ニ控訴スルヲ得ヘキ事

第三條 凡控訴ヲ為ントスル者ハ控訴狀ヲ認メ裁判
言渡シノ日ヨリ三月ノ期限内 三月ノ期トハ此月此
日迄 裁判ヲ受タル裁判所ニ差出スヘシ裁判所_在ラ
サル地方ハ其縣廳ニ差出スベキ事
但訴答文例第二十條ヲ見合スベシ

第四條 控訴狀ヲ差出シタル時其裁判所或ハ縣廳ニ
テハ一件書類ヲ其訴狀ニ添ヘ訴人ト共ニ直チニ其
上ノ裁判所ニ送付ス可キ事

五十二

同七年九月二日
司法省第九四号達 官ニ對スル訴訟取扱ヒ

今般人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟取扱ニ付假規
則別冊之通相設候間以後右ニ準據可致候條此旨相達
候事

第一條 凡人民ヨリ官府ニ對シ一般公同ニアラサル
人民一個ノ訴訟ハ司法官ニ於テ受理スヘシ其事件
左ノ如シ

但闔區内又ハ幾個ノ人民共有ノ物及會社等ハ一
個ノ人ト看做スヘシ

一官府所有ノ上地ニ關シタル事

一官府ノ會計及ヒ金銀貸借ニ關シタル事

一官府ノ管轄スル建造物等ニ關シタル事

第二條 訴訟事件ニ付テハ被告タル官府ハ其長官ヨ

リ其代人ヲ撰ミ差出スヲ得可シ

其代人ノ外更ニ事件ノ証ヲ取ル為メ主務ノ官吏ヲ
呼出サバルヲ得サルハ其本人ヲ呼出スヲモアル
ベシ

但シ奏任以上ニ係ルモノハ奏請ヲ經テ區處ス

第三條 裁判上官府ヨリ人民ニ對シ償還スヘキ條理
アルトキハ其事由及ヒ裁判ノ見込ヲ具狀申稟スヘ
シ

若シ主務ノ官吏一己ノ失錯ニ出テ其者ヨリ償還ス
ヘキハ具狀申稟スルニ及ハズト雖モ事情止ムヲ得
ザル場合ニテ官府ヨリ償還セザルヲ得ザルトキ
ハ具狀申稟スルヲ前項ニ同シ
但具狀申稟ヲ經テ裁決スルモノハ之ヲ終審トシ
更ニ控訴スルヲ得ス

第四條 右ニ記載シタル場合ノ外人民一個ノ事ニア
ラザル一般公同ノ為メニ起ル訴訟ニテ行政裁判ニ
歸スル者ト雖モ當今其設置ナキヲ以テ之ヲ訴フル
者アルトキハ先以テ之ヲ具狀申稟シ正院ノ指圖ヲ
乞フベシ
一官ノ會計ニ付一般ノ人民ニ關スル事

- 一 道路ヲ作ル事ニ付一般ノ人民ニ關スル事
- 一 工部ノ製造建築ニ付一般ノ人民ニ關スル事
- 一 此官廳ト彼官廳トノ間ニ起ル權限ノ事
- 一 行政官ト司法官トノ間ニ起ル權限ノ事

但右ノ裁判ニ付テノ手續ハ第二條第三條ニ同ジ
五十三 同七年九月廿二日
司法省第二十六号達 終審始審ノ權限

明治六第百九十八號並ニ第二百三號控訴ノ定限ハ其
書件ニヨリ終審始審ノ權限左ノ通決定候條此旨布達
候事

- 第一 人民相互ノ訴訟
- 第二 院省使府縣ヨリ人民ニ對スル訴訟
但シ臨時出張ニ非スシテ各地方ニ於テ確定設立

シタル院省使ノ支廳ハ對スル人民ノ訴訟ハ其支
廳所管ノ裁判所ノ處分ニ歸ス

第三 裁判所ノ設ケアル各府縣廳ト人民トノ間ニ
起ル訴訟

但シ人民ヨリ府縣ノ支廳ニ對スル訴訟前條但シ
書ニ同ジ

右ハ各地方裁判廳ニ於テ始審ノ裁判ヲ為シ若シ控
訴ヲナシタル片ハ司法裁判所ニ於テ終審ノ裁判ヲ
為スヘキ事

- 第一 人民ヨリ院省ニ對スル訴訟
- 第二 院省使府縣各地方裁判所ノ間ニ起ル訴訟
- 第三 裁判所ノ設ナキ各府縣管下ノ人民ヨリ其各

府縣廳ニ對スル訴訟

第四 人民ヨリ舊諸藩ニ對スル藩債ノ訴訟

第五 各地方裁判所ト人民トノ間ニ起ル訴訟

右ハ司法省裁判所ニ於テ始審ノ裁判ヲトスヘク臨
時裁判所ニ於テハ終審ノ裁判為スヘキ事

五十四 同七年十月十九日 府縣ノ添翰
第百九号御布告

自今他ノ管轄ノ裁判廳ニ訴訟ヲ為ス者添翰ヲ受クル
ニ及バス控訴ヲ為ス片ハ添翰ヲ受クベシ

五十五 同八年五月二十四日 控訴上告手續
第九十三号御布告

今般大審院ニ上等裁判所ヲ被置候ニ付控訴上告手
續別冊ノ通相定候條此旨布告候事
控訴上告手續

第一章

控訴ノ事

第一條 凡ソ府縣裁判所ノ初審ニ服セスノ再ヒ上等裁判所ニ訴ヘ覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云

第二條 控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハズ

第三條 控訴ハ一タビスルコトヲ得再タビスルコトヲ得

ス

第四條 府縣裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタル時

原告被告ノ雙方又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナル時

ハ裁判言渡ヨリ第七日マテニ裁判言渡ノ翌日ヨリ數フ裁判言

渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルコトヲ得ヘ

シ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルコトヲ

要スルノ場合ニ於テハ七日内ト雖モ控訴スルコトヲ得

第五條 府縣裁判所ノ裁判言渡ヨリ三ヶ月三十日ヲ以テ一月ヲ

ストヲ過ル片ハ控訴スルコトヲ許サズ但シ府縣裁判

所ヨリ上等裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ片ハ

期限三箇月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ増スヘシ

第六條 控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル府縣裁判

所ニ届ケ出ヅ可シ但シ添翰ヲ乞フニ及ハズ

第七條 前條ノ届ヲ受ケ取リタル府縣裁判所ハ裁判

言渡ノ執行ヲ停止ス可シ若シ上等裁判所ノ請求ア

ル時ハ府縣裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込

等ヲ差出ス可シ

第八條 上等裁判所ニ捧グルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スベシ

第二章

上告總則ノ事

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云フ

第十條 上告スルヲ得ルノ事件ハ

第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ユ

第二 聽斷ノ定規ニ乖ク

第三 裁判法律ニ違フ

第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニテ控訴ヲ受クルノ所ニアラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ

上告スル者アルモ之ヲ付ケテ理セス

第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ越ル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルヲ得

第十三條 凡ソ上告シタル者己ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フルヲ得ス

第三章

民事上告ノ事

第十四條 民事ノ上告スルヲ得ル者ハ己ニ上等裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル者ニ限ル

第十五條 上告ヲ為サント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ直チニ上告狀正副二本ヲ大審院ニ捧クベシ而シ同時ニ被告人ニ通知スルヲ要ス大審院ヲ去

ルノ距離八里ヨリ遠キ片ハ二月ノ外八里毎ニ一日
ヲ増ス定期ヲ過タル片ハ上告スルコトヲ許サズ其上
告狀ハ原被告人ノ姓名貫籍裁判ヲ得タル年月日ヲ記
シ上告ノ理趣ヲ明詳ニシ及ヒ原裁判ノ寫ヲ添フヘ
シ

第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添ヘテ金拾圓ヲ大審
院ニ預クベシ若シ其金高ヲ預ケサル片ハ上告ヲナ
スコトヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケザル片ハ其預リ金ヲ没入
ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ
預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後
之ヲ欠ケテ原裁判ヲ破毀セザル時ハ預リ金ヲ没
入シ又訴訟入費規則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償シ
△ 被告人トハ上告
者ノ相手方ヲ云

第十七條 上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届ケ出ツ
ヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日内ニ大審院ニ遞
送スヘシ

第十八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停ス大審院已
ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通報
シ大審院ノ書記局執行ヲ止メ更ニ審判落著ノ日ニ
至テ前ノ執行ヲ取消ノ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ
第十九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代

言人ヲノ之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

第二十條 大審院ノ民事課ニ於テハ判事列席ハ五人

以上ヲ云以下之ニ倣ハ臨ミ原告人又ハ代言人ヲノ上告狀ヲ讀

上シメ及陳述ヲ審聽シ若シ當然ノ上告ナリト決ス

ル時ハ原被ノ對審ヲ爲シタル上判決スヘキ旨ヲ言

渡ス可シ

第二十一條 判事審聽シ若不當ナル上告ナリト決ス

ル時ハ何々ノ理由ヲ以テ受理セザルノ旨ヲ言渡ス

ベシ

第二十二條 第二十條ノ言渡シヲ爲シタルノ後二日

内ニ大審院ヨリ被告人呼出狀ヲ仕出ス可シ此ノ呼

出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フベシ

第二十三條 被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十

日内ニ答辨書ヲ作り自身又ハ代言人ヨリ之ヲ大審

院ニ捧クヘシ但シ被告人ノ住所ヨリ大審院ニ至ル

ノ距離八里ヨリ遠キ片ハ八里毎ニ一日ヲ増スベシ

第二十四條 民事課ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取シ

トキハ課長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ專理員ヲ命

シ一件書類ヲ取纏メ遲緩ナク一件始末書ヲ作ラシ

メ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニ原被

對審ノ呼出狀ヲ原被雙方ニ送達スヘシ

第二十五條 原被對審ノ節ハ判事列席庭ニ臨ミ最初

ニ專理員一件始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被

告ノ陳述次ニ原被交互ノ論辨ヲ審聽シ而メ後ニ原

告人上告理アリト決スルキハ何々ノ理由ヲ以テ原
裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付キ更ニ其裁判所ニ於
テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ
旨ヲ言渡スヘシ

第二十六條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スルキハ何
々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ

第二十七條 大審院ノ破毀ニ因リ移ス所ノ裁判所亦
タ大審院ノ旨ニ循ハザルヲ以テ大審院ニ於テ合員
會議ノ判決ヲ爲ス時ハ專理員ヲ命スルニ必刑事課
ノ判事ヲ用フベシ

第四章

刑事上告ノ事

第二十八條 違警罪及死罪ヲ除クノ外一切ノ刑事皆
上告スルヲ得

第二十九條 刑事ニ付キ上告スルヲ得ヘキノ人

第一 囚人

第二 檢事 檢事無キノ地方ハ警
察官之ニ代ルヲ得

第三十條 上告ヲ爲サント欲スル囚人ハ裁判言渡ヨ
リ第三日迄ニ三日間ハ上告願狀ヲ其裁判所ノ書記
局ニ捧ケ又第十日迄ニ上告趣意明細書ヲ作り同ク
書記局ニ捧クベシ

但シ書記局ハ決放ヲ執行スル所ノ地方官ニ其事
ヲ達スベシ

第三十一條 檢事ノ上告セント欲スル者ハ裁判言渡

ヨリ二十四時ノ内ニ上告ヲ爲スルヲ囚人ニ達シ又
第十日迄ニ上告趣意明細書ヲ作り之ヲ司法卿ニ送
遞スヘシ

但シ檢事ハ上告ヲ爲スルヲ決放ヲ執行スル所ノ
地方官ニ通知スヘシ

第三十二條 檢事及囚人上告ノ期ヲ過ル時ハ上告ノ
權ヲ失フベシ

第三十三條 決放ヲ執行スル所ノ地方官ハ囚人若ク
ハ檢事ヨリ上告スルヲ達シタル時ハ決行ヲ止メ
以テ上告ノ落著ヲ待チ獄舎ニ於テハ其囚人ヲ別舎
ニ勾置ス可シ 別舎ナキ者ハ便宜ニ
隨ヒ監護スルヲ要ス

第三十四條 囚人自ラ上告狀ヲ書記スルヲ能ハザル

時ハ代理人ヲ獄中ニ延キ 獄中ヲ劃リテ應接所ヲ設
ケ宅ノ囚人ト混セザルヲ
要ス 上告趣意明細書ヲ代書セシムルヲ得其代理人
ハ明細書ニ本人ト共ニ姓名ヲ記ス可シ本人自ラ姓
名ヲ記スルヲ能ハザル片ハ其事ヲ肩書スヘシ

但代理人ヲ獄舎ニ延タ時ハ之ヲ看守者ニ告ケ看
守者ハ之ヲ裁判所ノ書記局ニ届クヘシ

第三十五條 囚人幼年 十五年未
滿ヲ云 ニソ上告ヲ爲スノ權
利アルヲ知ラサル片ハ其親族 五等親
ヲ云 代リテ爲メ
ニ上告スルヲ得

第三十六條 裁判所ノ書記局ニ於テ上告趣意明細書
ヲ受ケ取リタル時ハ其文書類ヲ并セテ三日内ニ之
ヲ大審院ニ遞送スベシ

第三十七條 檢事上告スル時ハ上告趣意明細書及其
文書類ヲ司法卿ニ遞送シ司法卿之ヲ大審院ノ檢事
ニ付ノ大審院ニ原告セシム

第三十八條 大審院ノ刑事課ハ議事ヲ用ヒ上告ヲ審
按シ上告不當若クハ理ナシト決スル時ハ理由ヲ付
シタル判文ヲ原裁判所ノ書記局一發付シ上告人ニ
傳達セシメテ後チ決行セシム上告理アリト決スル
時ハ原裁判ヲ破毀シテ更ニ他ノ裁判所ニ移シ若ク
ハ大審院自ラ之ヲ審判スヘキノ旨ヲ判シ若クハ單
ヘニ其擬律ヲ平翻ノ原裁判所ノ書記局ニ發付シ處
分セシム其判文ハ並ニ理由ヲ付スヘシ
第三十九條 上告ノ檢事ヨリ出タル者ハ判文ヲ大審

院ノ檢事ニ付シ大審院ノ檢事ヨリ司法卿ヲ經由ノ

原裁判所ノ書記局ニ下シ處行セシム

五十六

同八年五月廿四日
第九十四号御布告

控訴略則廢ヒラル

明治七年五月第五十四号布告民事控訴略則相廢候條

此旨布告候事

五十七

同八年五月二十九日
司法省甲第五号布達

官ニ對スル訴訟ノ受理所

各人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル訴訟ハ當分各上等

裁判所ニ於テ受理候條此旨布達候事

五十八

同八年五月二十九日
司法省甲第六号布達

控訴上告規則ニ付達書廢存

今般第九十三号控訴上告規則御布告相成候ニ付テハ
當省ヨリ及布達候明治五年第四十六号並六年第二十
三号共取消シ七年第二十六号中右規則ニ相觸候分ハ

是亦取消候條此旨更ニ布達候事

五十九

同八年五月三十日
司法省甲第七号布達 同上

今般第九十三号ヲ以控訴上告規則御布告相成候ニ付
テハ當省甲第四号布達ハ取消候條此旨更ニ布達候事

六十

同八年五月三十日
司法省甲第八号布達 控訴上告ノ限日ヲ算ス

今般第九十三号ヲ以控訴上告規則御布告相成候處大
審院並東京上等裁判所ハ既ニ開廳候得共大坂長崎福
島上等裁判所ハ未開廳不相成候ニ付右御布告ヲ承知
セシ日ヨリ追テ開廳施行ノ達ヲ承知セシ日迄ハ控訴
上告期限日數ハ算入不致儀ト可相心得此旨布達候
事

六十一

同八年六月三日
司法省甲第九号布達 裁判章程等定ルニ付達書廢存

今般各裁判所章程御更正控訴上告規則被定候ニ付テ
ハ從來當省ヨリ布達ニ及置候分右章程規則ニ矛盾候
廉ハ一切取消候義ト可相心得此旨布達候事

但元司法省裁判所ノ初審裁判ニ服セヌシテ其控訴
期限内ニ有之者ハ控訴ニ付テノ被告人ヲ管轄スル
上等裁判所ニ控訴致シ不苦尤右御布告ヲ承知セシ
ヨリ本号布達ヲ承知候マデノ日數ハ控訴期内ニ算
入セザル儀ト可相心得事

六十二

同八年六月七日
第百号御布告 控訴上告手續中ノ處分

本年五月第九十三号布告控訴上告手續第十六條上告者
預ケ金ノ儀ハ追テ相達候迄差出ニ不及候條此旨布告
候事

六十三 同八年十一月十二日 開拓使へ對スル訴訟
司法省甲第十四号布達

各人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル訴訟受理ノ儀ニ付
本年甲第五号ヲ以テ及布達置候處自今人民ヨリ開拓
使ニ對スル訴訟ハ東京上等裁判所ニ於テ受理候條此
旨布達候事

六十四 同八年十二月十二日 訴訟不受理ノ取扱ヒ
司法省甲第十六号布達

民事訴訟目安糺ノ際不受理又ハ願下ケノ取扱方左ノ
通相定候條此旨布達候事

第一條 裁判官訴訟ノ目安糺ヲ為シ受理ス可カラズ
ト思料スル時ハ必ス其受理ス可カラサルノ理由ヲ
記シタル判文ヲ作り訴狀ト共ニ下渡シ可申尤モ判
文短簡ナル者ハ其判文ヲ訴狀ノ表紙又ハ訴狀ノ末

ノ餘白ニ朱書シ裁判所ノ印ヲ押シ下戻シ候テモ不
苦候事

第二條 原告人ヨリ差出シタル訴狀ノ取り下ケヲ願
出ル時ハ取り下ケヲ為ス事ノ理由ヲ審問シ原告人
ニ於テ出訴スルノ權利ヲ拋棄スル事ヲ申立ルニ於
テハ原告人ヲシテ何々ノ理由ニ因リ出訴スルノ權
利ヲ拋棄スルニ付キ控訴又ハ上告ヲ為サ、ルノ旨
ヲ記載シタル願書二本ヲ受取り其一本ハ裁判所ニ
留置キ其一本ニ願意ヲ聞届ケタル旨ヲ朱書シ裁判
所ノ印ヲ押シ下ケ戻ス可キ事
但裁判官ヨリ理解ヲ為シ訴狀取下ケ願ヲ出サシ
ムルヲ得ス

六十五

同九年二月廿九日 控訴上告手續中改正
第二十三号御布告

明治八年五月第九十三号布告控訴上告手續第十五條別
紙ノ通改正候條此旨布告候事

控訴上告手續

第十五條 上告ヲ為ント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二
 月内ニ上告狀ヲ大審院ニ捧クヘシ而ノ同時被告人
 ニ通知スルヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ル
 ノ距離八里ヨリ遠キ時ハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ
 増ス此定期ヲ過レハ上告スルヲ許サス上告狀中
 ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

第一 原告人ノ住所身分氏名
 第二 被告人アレハ其住所身分氏名

第三 被告人ノ住所身分氏名
 第四 證人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名
 第五 府縣裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレ
 タル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日
 第六 上等裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレ
 タル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日
 上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ
 上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘシ

第一 府縣裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ビ
 裁判言渡書ノ寫
 第二 上等裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ビ
 裁判言渡書ノ寫

第三 上告狀中ニ憑據ト為ス書類ノ寫ノ各書類ニ番
号ヲ朱書シ編シテ一冊ト為シ又ハ葉數多ニ付編シ
テ幾冊ト為シタル者

右ノ訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持ヒサル
者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟庭ニ取下ケ
見坐ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ取ルコトヲ得可シ
若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サ、ルニ因
リ上告人其寫ヲ出シ能ハサル時ハ其旨ヲ上告狀中ニ
記載スヘシ

○勸解訴訟

六十六

明治八年九月八日
司法省達東京府

勸解詞訟假規則

今般當府第貳大區四小區巴町三十四番地第三大區四

小區富士見町六丁目壹番地第五大區三小區二長町貳
番地へ東京裁判所支廳設置候ニ付勸解並裁判ヲ乞
候者ハ別紙假規則ニ照準シ願出ベク候此旨布達候事
但開廳ノ儀ハ追テ可相達候事

第一條 第一第二第七大區ハ巴町支廳第三第四第八

第九大區ハ富士見町支廳第五第六第十第十一大區
ハ二長町支廳へ訴へ出ヘシ

第二條 民事ノ訴訟ハ金額十圓以下ナリトス

第三條 刑事ノ訴訟懲役三十日以下ナリトス

但他管甲ヨリ本管乙ニ掛ル訴訟モ亦本條ニ準ス

第四條 民事ノ訴訟ニ於テ控訴セント欲スル者ハ本
年太政官布告第九十三号ニ照準シ東京上等裁判所

ハ控訴スヘシ

第五條 刑事ノ裁判ニ於テ上告セント欲スル者ハ本年太政官布告第九十三号ニ照準シテ上告スヘシ

第六條 凡民事ニ係ル訴訟ハ金額ノ多少事ノ輕重ニカ、ワラズ訴訟人ノ情願ニ任セ支廳ニ於テ勸解スヘシ

第七條 勸解ヲ乞フ者ハ訴訟ヲ作ルニ及ハス直ニ證據書類ヲ携ヘ該廳ヘ願出ヘシ

六十七

同八年十月九日
司法省達東京府ヘ 勸解ハ本人出頭

勸解ハ其爭論ノ始末ヲ本人ヨリ直ニ聞取ルニアラサレハ事情ヲ盡シ難キ儀ニ付本人ニテ可罷出候條此旨布達候事

但本人病氣等不得止事故アルセツハ親類ノ内ヲ以

テ名代人トシテ差出可申事

六十八

同八年十二月二十日
司法省布達東京府ヘ 假規則中ノ改正

先般及布達東京裁判所支廳管轄區分並取扱假規則第七條左ノ通改正候條此旨布達候事

勸解ヲ乞フ者ハ訴狀ヲ作ルニ及ハス直チニ該廳ヘ願出其事由ヲ申述スルヲ得ベシ

六十九

同八年十二月廿八日
司法省第十五号達 勸解支廳設置ノ見込

其裁判所管内ニ於テ支廳有之向ハ別紙假規則ニ照シ事務可取扱未タ支廳不被置向ハ設置ノ見込取調可申立候條此旨相達候事

但右假規則管内ヘ施行ノ節ハ現今今後共本廳ヨリ

一般布達可致事

裁判支廳假規則

第一條

裁判支廳ハ土地ノ便宜ニ隨ヒ其區ヲ畫シ之ヲ置クベシ必スシモ其數ヲ限ラス

但本廳所在ノ地ハ別ニ支廳ヲ置モ又ハ本廳内ニ於テ一庭ヲ設ケ若クハ日時ヲ分チ本廳ノ庭ヲ用ヒ支廳ノ務ヲ行ハシムルモ皆其便宜ニ隨フヘシ

第二條

民事ハ金額百圓ヲ以テ極ト為ス百圓以下ハ該地方ノ便宜ニ隨ヒ其程限ヲ定ムルヲ得ヘシ

第三條

刑事ハ懲役三十日以下ト為ス四十日以上百日以下ニ係ルハ其罪迹明白ナル者ハ便宜處令シ明白ナラサル者ハ審察ヲ具シテ本廳所長ノ決ヲ取ルヘシ

第四條

民事ニ於テ控訴スル者ハ本年第九十三號布告ニ照シ直チニ上等裁判所ニ出サシムヘシ

第五條

刑事ニ於テ上告スル者ハ本年第九十三號布告ニ照シ直チニ大審院ニ出サシムヘシ

第六條

凡ソ民事ニ係ルモノハ金額ノ多少事ノ輕重ニ拘ハラズ詞訟人ノ情願ニ任セ之ヲ勸解スヘシ

但勸解ハ必スシモ定規ニ拘ハラサル者トス

第七條

勸解ヲ乞フ者ハ訴狀ヲ作ルニ及ハス直チニ該廳ニ願
出テ其事由ヲ陳述スルヲ得ベシ

第八條

勸解ヲ乞フ者ハ必ス本人自ラ出頭ス可シ
但疾病事故等ニテ己ヲ得サル時ハ其代人トシテ親
戚ヲ出スヘシ

七十 同九年一月廿五日 同上
司法省第十二号達

明治八年十二月第十五号ヲ以テ裁判支廳假規則別紙
ノ通各府縣裁判所へ相達置候條其縣ニ於テモ別段經
費ニ関セザル様右ニ照準シ可取計此旨相達候事

外國詞訟

七十 明治六年六月十三日 外國人訴訟手續
第二百五号御布告

外國人訴訟規則別紙之通被相定候條此旨相達候事

外國人日本人ニ對シタル事件各開港場或ハ開市場裁

判所へ訴出ル者ハ總テ左件ノ定則ヲ遵守スベシ 右規
則各

國公使談判相整フ迄實際
施行見合セ可申ト達アリ

聽訟手續

第一章 訴訟ヲナス者ハ都テ書面ヲ以テシ原告人或

ハ正シク法ニ隨テ委任ヲ受タル代人ヨリ左ノ箇條

ニ從ヒ明細ニ認メ出スヘシ其訴狀或ハ他ノ書類ニ

テモ外國文ヲ以認アルモノハ裁判所ニテ要スル時

ハ一々日本文ヲ添ヘ出スヘシ

第一 原告人ノ本國並日本居留ノ住所氏名

第二 被告人ノ住所身分姓名

第三 求ル處ノ金額或ハ賠償ノ高

第四 訴訟ノ由テ生スル明細ナル情實

第五 取引中被告人ヨリ原告人ノ請取タル金及品物アレハ其員數ヲ明細記載スベシ

第二章 訴狀ノ書類ハ總テ本書ト真正ノ寫ト都合ニ通ヲ出スベシ

第三章 訴狀ヲ請取タル上ハ其證據明確ナル片ハ直ニ其被告人ヲ裁判所ニ呼出シ答辨ヲナサシムベシ
證據明確ナラサル片ハ裁判所見込ヲ以テ原告人ヨリ證據金又ハ請合証書ヲ出セシ上被告人ヲ呼出ス

ハシ

第四章 被告人ノ答辨モ亦自身或ハ正ク法ニ隨テ委任ヲ受タル代人ニテ記名シタル書面ヲ以テ其訴狀中ノ件々ニ對シ一々答辨ヲ為スベシ

第五章 被告人ノ答書モ亦正副二本ヲ出スベシ原告人一見センコトヲ乞フ者アラハ副本ヲ以テ貸與ルコトヲ得セシムハシ

第六章 訴狀ハ被告人ヨリ書面ヲ以テ開申セル時日ヲ以テ順次ヲ立テ裁判ヲ為スベシ但事故アリテ原告人及被告人ノ雙方或ハ其一方ヨリ裁判猶豫ヲ願出ル時ハ此例ニ非ス

第七章 審問及裁判ノ日限ハ前以雙方ノ者共ハ報知

シ置一件始終ノ審問ハ凡テ之ヲ公ニスヘシ諸引合
人ハ其訟庭ニ出テタル時ハ先引合トシテ差出セシ
本人ヨリ引合人ニ對シ一々其事蹟ヲ質問シ而シテ
後相手方亦審官ニ乞ヒ右ノ引合人ハ對シ真否ヲ實
問スルヲ得ヘシ若シ又一方ノ人自ラ証明センコトヲ
申立ルキハ審官ノ令ニヨリ相手方之ニ對シテ質問
スルヲ得ヘシ審官ハ此間何時ニテモ引合人ニ質問
スヘシ引合人ハ引合ノ任ニ當ル前毫モ欺詐ヲ用ヒ
ス誠實ニ應答ヲナス可キコトヲ陳述スヘシ

第八章 引合人ノ申立ヲ聞終リテ後尚一方ヨリ申立
ル事アリト乞フ時ハ其對論ヲ聞キ若シ雙方ヨリ申
立ルコトアル片ハ原告其對論ヲ始メ且ツ之ヲ終ルコト

得ヘシ

第九章 原告人或ハ被告人孰レニテモ差出セル證據
書ハ裁判所ノ免許ヲ得テ寫ヲ差出シ本書ヲ取下ル
ヲ得ヘシ

第十章 譯官ヲ要スル片ハ雙方自ラ之ヲ差出スヘシ
若シ出シ能ハザル片裁判所ニテ相當ノ人ヲ得ヘキ
片ハ裁判所之レニ命シテ辨セシメ其用ニ供セル方
ヨリ相當ノ料ヲ差出サシムヘシ

第十一章 都テ訴訟ノ裁判ハ其裁判ノ條理ヲ書面ニ
認メ訴狀ニ添ヘ置クヘシ孰レノ方ニテモ望ミアル
時ハ右裁判或ハ右裁判或ハ意見ノ書及其訴訟ニ關
シ差出セル書類ノ寫ヲ一見スルコトヲ得ヘシ

第十二章 裁決ノ後十日ヲ經サル内裁決ヲ受ケシ方ヨリ相手方ニ掛合ノ上再ヒ裁判ヲ乞フ時ハ裁判所之ヲ聽用スヘシ尤裁判所ニテ以前ノ裁斷不當ナリト思フ時歟或ハ裁決ノ後新タニ肝要ナル證據ヲ得如此證據ヲ差出スニ於テハ裁判所必ス以前ノ裁決ヲ更變スルノ理アリト思フ時ニ限ルヘシ

第十三章 各港場裁判所ニ於テ處斷セル裁判ノ趣ニ不伏ナル時ハ司法省裁判所へ上告スルヲ得ヘシ

第十四章 前條ノ如ク上告スルニハ裁決ノ後三ヶ月ヲ越ユヘカラス且右ノ情由豫メ相手方或ハ代人ノアル時ハ其代人ニ書面ヲ以テ告知ラセ且其開港場ノ裁判所へモ豫メ其情由ヲ申立ヘシ

但上告スルモノ故アリテ此期限ヲ延シテ欲スルモノハ預ケ金ヲナシ又ハ証書ヲ出シ豫メ願立ル片ハ事實不得止分ハ六ヶ月迄ハ裁判所之ヲ許容スヘシ既ニ上告ニ及フ時ハ其裁判ヲナシタル開港場或ハ開市場ノ裁判所ヨリモ司法省裁判所へ其情由ヲ告知シ雙方ノ口書及其訴訟ニ関シタル諸書付ノ寫ヲ差出スヘシ

第十五章 裁判所ハ裁判ニヨリテ決定スル所ノ償還ハ速ニ之ヲ遂ケシムル様取計ヘシ

治罪手續

第一章 日本人ノ罪科アルヲ外國人ヨリ申出ル片ハ公然之ヲ吟味スヘシ原告人及其引合人トナル可ト

申出タルモノ或ハ被告人及其引合人タルヘキ者ヲ
吟味スルヲ猶訴訟手續ニ於ケルカ如シ

第二章 裁判所ハ訴訟裁判ニ於ケルカ如ク罪科裁判

ニ於テモ原告人或ハ被告人ヲ論セス孰レノ方ニテ
モ其引合人トナルヘキモノヲ呼寄セント欲スルカ
ハ其裁判所ノ權限ニ循ヒ之ヲ扶助ナスヘシ

第三章 罪科ノ裁決ハ書面ヲ以テシ被告人罪科ニ伏
スル片ハ之ヲ普通至當ノ罪科ニ處スベシ

七十二

同六年癸酉八月八日
第二百八十九号御布告外國人詞訟

外國人民ヨリ我國人民ニ對スルノ詞訟ハ勿論司法省
ニ於テ裁判可致候得共外國政府並外國人民ヨリ我國
政府ニ對スルノ詞訟ハ外務省ニ於テ取調候條以來右

等政府ヘ對シ候事件ハ外務省ヘ引渡可申且現今各裁
判所及ビ各縣廳ニ於テ取扱居候分其筋ニ涉リ候者ハ
書類一切外務省ヘ引渡可申候此旨相達候事

七十三

同八年五月十二日
司法省第三号布達内國人ヨリ外國人ヘ係ル訴訟

内國人ヨリ外國人ヘ係ル民事刑事ノ訴訟手續左ノ通
相定候條此旨布達候事

一内國人原告ニテ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟ハ原
告人其事由ヲ各開港開市場ノ府縣廳ニ申出其廳ノ添
狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事ヘ申訴ス可シ

○出訴期限

七十四

明治四年辛未六月
十二日御布告 無証據賣掛ケ金

自今賣掛ケノ品縱令十年以内ニ候共銘々記載ノ帳面ヘ

借主ノ印章無之分ハ無証據ノ貸金銀同様一切取揚裁
判不申付候條此旨可相心得事

七十五

同五年壬申十月二日
第百九十五号御布告

娼藝妓解放前ノ貸金
娼妓藝妓等年季奉公人解放ニ付貸借訴訟總テ不取上
候事

七十六

同五年壬申十月七日
第百三十五号御布告

華士族卒ハ掛リ候金穀貸借ハ明治二年己巳六月郡縣
ノ制被仰出候以前ノ令ハ裁判ニ不及候事
静岡及仙臺會津其外再立ノ藩々再立以前ノ金穀貸借
ハ裁判ニ不及候事
自今貴賤上下一般ノ人民互ニ期ヲ約シテ金銀貸借ニ
若シ期ニ及テ不返時内證屢催促ヲナスト雖モ期月後

滿五年ニ至ルマテ一度モ訴出サル者ハ裁判ニ不及事

但當七月以前ノ貸借ノ分ハ此限ニ非ス

從前今後共家祿ヲ引當ニ致シ候金穀貸借ノ儀ハ一切
裁判ニ不及候事

七十七

同五年壬申十月九日
司法省第百二十二号達

第百九十五號御布告心得
本月二日第百九十五號ニ而被仰出候次第ニ付左ノ
件々可心得事

人身ヲ賣買スルハ古來制禁ノ處年季奉公等種々ノ名
目ヲ以テ其實賣買同様ノ所業ニ至ルニ付娼妓藝妓等
雇入ノ資本金ハ賍金ト見做ス故ニ右ヨリ苦情ヲ唱フ
ル者ハ取糺ノ上其金ノ全額ヲ可取揚事
娼妓藝妓ハ貸金賣掛ケ滯金等ハ一切債ルヘカラス

同上ノ娼妓藝妓ハ人身ノ權利ヲ失フ者ニテ牛馬ニ異ナラフ人ヨリ牛馬ニ物ノ返辨ヲ求ムルノ理ナシ故ニ從來同上ノ娼妓藝妓ヘ貸ス所ノ金銀並賣掛ケ滯金等ハ一切債ルヘカラザル事

但本月二日以来ノ分ハ此限ニアラズ

人ノ女子ヲ金談上ヨリ養女ノ名目ニ為シ娼妓藝妓ノ所業ヲ為サシムル者ハ其實際上則人身賣買ニ付從前今後可及嚴重之處置事

七十八

同五年壬申十月廿二日 平民相互ノ貸借

平民相互ノ金穀貸借慶應三丁卯十二月晦日以前ニ係ル者ハ一般裁判ニ不及明治元年戊辰正月以後ノ分ハ裁判ニ及候事

七十九

同五年壬申十一月廿七日 第三百號御布告ニ付心得

太政官第三百號ノ御布告ニ基キ左ノ通可心得此旨及ニ布達候事

第一條 華士族卒ハ掛ル金穀貸借ハ明治二年己巳六月廿五日以前ノ分ハ不取上翌廿六日以後ノ分ハ取揚裁判スベキ事

但華士族ヨリ平民ハ掛ルモ本條通り為ルベシ

第二條 預リ金穀ハ証文面預ケ金穀ノ名目ニテ利息有之又ハ預リ人ヘ融通セシムル廉ヲ以テ禮金等ヲ請ル分ハ第一條ノ通り心得可ク尤金ク預金ニテ利息禮金ヲ請ケサル分ハ及裁判若シ其金穀ヲ費用シ濟方不埒明トキハ斷獄課ヘ引渡スヘキ事

第三條 元士族卒當時歸農商ノ分及己巳六月ノ改革

ニ付三代以下ニテ平民トナル者己巳六月廿五日以

前ノ証文ニテ其節士族卒ナレハ取上ヘカラザル事

第四條 神職僧侶等ニ關スル分ハ貸借ノ節准士族卒

ナレハ士族ヲ以取扱フヘキ事

第五條 明治二己巳六月廿五日以前金穀貸借ヲ新規

証文ニ書改メタル分ハ不取上事

第六條 己巳六月廿五日以前ノ貸借ニテ華士族卒ハ

掛ル分ハ御布告前審判又ハ對談日延中ト雖モ濟方

不及裁判旨可申渡事

第七條 御布告前身代限申渡濟ノ分ハ申渡ノ通可及

處分事

第八條 後前出訴吟味中和解シ家祿ヲ引當トナシ新

規証文ニ改メ濟口聞届タルハ御布告ニ依リ不及裁

判事

第九條 從前華士族ノ名目ヲ用ヒタル貸附金ハ三百

兩ノ御布告ニ依リ取上クヘカラサル事

第十條 動産不動産ヲ債主ニ質入シタル者ハ取上ケ

裁判可致事

附沾券狀ヲ債主ニ渡シ金穀ヲ借用セシムルモ本

條ニ準シ質入ト看做スヘキ事

八十 同五年壬申十一月廿八日 二曆ノ數衆除

明治五年十二月ヨリ以前ニ取結ヒ候諸約定ノ分若シ

明治六年一月一日以後ニ相掛ル訴訟ハ大陰曆月日不

足ノ分ヲ大陽曆月日引直世八日ヲ加其期限ト可相定事

八十一 同六年一月十三日 無期限証文ノ裁判期限

金穀貸付証文ノ内返濟期限無之款又ハ出来次第ニ返濟可致等ノ証書取置後日訴出ルニ於テハ裁判申渡ヨリ十二月ノ内濟方可申付事

但從前今後共無年季貸付中内証屢返濟ヲ促ト雖モ滿五年ニ至ル迄一度モ不訴出者ハ裁判ニ不及候左土地家屋等ノ貸賃ハ不動産ニ属スル儀ニ付滿五年ヲ過ルト雖モ可及裁判事

八十二 同六年三月三十一日 貸借裁判期限

壬申第三百號御布告第三條但書ノ儀ハ左ノ通可相心得事

壬申七月以前ノ金穀貸借ニテ既ニ同七月以前返濟期限過去タルハ同七月ヨリ五ヶ年内訴出サル者ハ不及裁判事

壬申七月以前ノ貸借ニテ返濟期限同七月後ニ係リタルハ期限後滿五年ニ至ルマテ一度モ訴出サル者ハ不及裁判事

八十三 同六年六月十二日 助郷等ノ貸金

諸道各驛附屬村々助郷其他驛費ニ關スル滯金丁卯十二月以前ノ分ハ一般不及裁判候事

八十四 同六年十一月五日 貸借出訴期限

金穀貸借ヲ始トシテ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ雙方ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ

結ビ置タルニ一方ノ者其條約ヲ破リタルトキハ早速
 裁判所へ出訴致シ不苦候處延期ノ勘辨ヲ加へ出訴ヲ
 見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤之事ニ付早速
 出訴イタシ候トモ亦ハ勘辨ヲ加へ候トモ人民ノ自由
 ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘辨中數歳
 月ヲ過去リ出訴致シ候時ハ貸方借方請人証人ノ内死
 亡又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ
 裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴
 ノ期限ヲ定候條來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ヒタ
 ル條約期限ニテ右出訴期限過去リ出訴セサル者ハ自
 分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取
 ヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免

候事

出訴期限規則

第一條

- | | |
|------------|----------------------|
| 一 學藝授業料 | 一 旅籠料 |
| 一 運送賃 | 一 飲食料 |
| 一 手附金 | 一 商人互ノ賣掛金 |
| 一 職人ノ手間代金 | 一 日雇人ノ給料 |
| 一 請負金 | 一 芝居等ノ木戸錢
又ハサジキ錢等 |
| 一 男女藝者ノ揚代金 | |
| 右ハ六ヶ月限 | |

第二條

- 一 醫師ノ診察及藥料

- 一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
 - 一 商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金
 - 一 一ヶ年期マテノ奉公人給料
- 右ハ一ヶ年限

第三條

- 一 期限ヲ定メタル貸付米及ヒ利足アレハ其利足
- 一 期限ヲ定メタル預金及ヒ利足アレハ其利足
- 一 家屋及ヒ土地ノ借賃 一 小作米金
- 一 證據金 一 敷金
- 一 物品ノ借賃又ハ損料 一 養育料
- 一 七ヶ年期マテノ奉公人給料
- 一 期限ナキ年金及一生涯ノ年金

右ハ五ヶ年限

第四條

條約証書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト看做シ候故何時出訴致シ候テモ苦カラザル事

第五條

従前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト看做スヘシ又従前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後ニ及リ事件ハ條約期限ノ切レタル翌日ヨリ第一條第二條第三條ノ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事

但明治五年壬申第三百號布告第三條ニ定メタル
規則ハ格別ナリトス

○喚出

八十五

明治五年六月十八日
華百八十二号御布告 呼出ノ節逃亡

訴訟被告人等ヲ官廳ヨリ呼出候節其以前己ニ致逃亡
候輩間々有之由ニ相聞ヘ以テノ外ノ事ニ候向後右等
心得違ノ者有之ニ於テハ地方官ニテ嚴重探索致捕縛
速ニ主管ノ廳ヘ可差送事

八十六

同六年五月
司法省達 勅奏官喚問

裁判上ニ於テ勅奏官位以上ノ者封書ヲ以テ及訊問候
儀是迄奏請ヲ不經取扱來候處右ハ章程中ニ其條無之
ニ付自然行違等有之モ難計仍テ今般猶又封書訊問ハ

奏請ヲ不經取扱候様更ニ確定候條此段相違候事

但各裁判所ニ於テ右取扱有之時ハ其趣無違滞本省
ハ可届出候事

八十七

同六年六月八日
司法省第八十九号達 官員ノ被告

裁判上ニ於テ諸官員ノ内相手取ラレ且引合等有之呼
出シニ及ヒ候節判任以下ニテモ是迄其所轄省ヲ經テ
本人ニ相違來候右ハ全ク一身ノ私事ニ係リ候儀ヲ一
々其省ヲ經由致候テハ諸事淹滞ハ不及申自然種々ノ
不都合ヲ生シ候ニ付以來裁判上呼出ノ儀ハ判任以下
ハ直ニ之ヲ達シ其所轄省ハ本人ヨリ届出候様可致
此段相違候事

八十八

同六年十二月七日
第四百五号御布告 同上

勅奏任官及ヒ華族其外有位ノ輩訴訟關係ノ節家令執事等ニテ相辨ス可キ分ハ格別ナリト雖モ若シ本人呼出シ審問及ハス候テハ事實明瞭ナラサルトキハ民法裁判上ニ限り奏問ニ及ハス直ニ本人呼出審問ニ及フヘク此旨布告候事

但勅奏任官ノモノ呼出ヲ受ケタルトキハ其奉職ノ官廳ヘ可相届事

八十九

同八年五月七日
第七十四号御布告

呼出シ無罪ノ者放費

各裁判所裁判所無之地ヨリ呼出ヲ受テ無罪ニ歸スル者放費ノ儀明治七年十一月第百廿七号ヲ以テ布告候處本年六月一日ヨリ渾テ其呼出シタル裁判所裁判所無之地方ハ其ヨリ支給候條此旨布告候事

九十

同九年一月九日
司法省第二号達

呼出シ拘留

従前民事呼出ノ上拘留致候儀モ有之哉ニ候處右ハ不都合ノ儀ニ有之自今不相成候條此旨相達候事

九十一

同九年二月五日
司法省第十七号達

勅奏官等本人呼出

勅奏官及華族ノ犯罪ニ付呼出方ノ儀ハ時々奏請ヲ經候成規ニ候處其違式註違罪ニ於テハ書面推問或ハ執事呼出等ニテ行届カサル節ニ限り直ニ本人呼出不苦候條此旨相達候事

○訴訟入費

九十二

同五年十一月二日
司法省第三十一号布告

訴訟入費償却假規則ノ改正

去ル九月廿九日第十七号ヲ以テ訴訟入費償却假規則定限布達致シ置候處此度改正更ニ左之通相達候事

第一條 訴狀其外書類認料

壹枚拾六行拾五字詰ニ付拾錢

但壹枚以下モ同價

右定限

第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二 被告人ノ答書ノ正本副本

第三 訴狀又ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫

第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據

ノ書類寫

第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被雙方

往復ノ文書

第二條 証人並引合人手當 一日ニ付五拾錢

但シ他所ヨリ罷出止宿者ハ二十五錢ヲ増ス

但シ差添人ノ儀ハ追テ定則相立候迄此例ニ依ル

右定限

第一 裁判所ニ於テ審判又ハ言渡ヲ受シ日

第二 裁判所ノ腰掛ニ於テ原告被告雙方立合ノ示

談ヲ為シタル日

第三條 同旅費 壹里ニ付拾錢 但歸路モ同斷

但前同斷

右定限

第一 旅行ハ一日ヲ十里詰トス

第二 兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ

甲路ヲ經ルト雖モ乙路ヲ以テ計算スヘシ

第三 瀛車又ハ瀛船ニ乗ル者ハ現ニ其里程ヲ以テ

計算スヘシ

第四 本條ハ日本管内ヲ通行スル者ノ為ニ設ク

第四條 被告人直ナル者ノ手當 一日ニ付五拾錢

但他所ヨリ罷出止宿スル者ハ二十五錢ヲ増ス原告人直ナル片ハ此手當ナシ

右定限

第二條ノ如クスヘシ

第五條 同旅費 壹里ニ付拾錢 但歸路モ同斷

右定限

第三條ノ如クスヘシ

第六條 通辨料 一日ニ付三圓

右定限

第二條第一第二ノ如クスヘシ 往返旅費ヲモ定額ノ

通り計算スヘシ

第七條 翻譯料壹枚ニ付十六行十五字詰貳圓

但一枚以下モ同價

右定限

第一條ニ同シ

第八條 使賃 一里ニ付拾錢 半里以內ハ五錢

但五里以外ハ歸路モ同斷

右定限

第一 裁判所ニテ示談中原告被告承諾ニテ遣ハシタル使賃

第二 裁判所ニテ示談中原告被告一方ノ者掛裁判役ノ檢印ヲ經タル使賃

第三 原告被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セザ

ルトキ掛裁判役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ責ムル使賃

第四 原告被告雙方ノ為又ハ一方ノ為ニ裁判所ヨ

リ臨時ニ遣ハシタル使賃

第九條 郵便並電信料 定價

右定限

第八條ニ同シ

第十條 身代限諸雜費 臨時計算ニ定ムヘシ

右定限中揭示スル條件ノ外ハ曲者ヨリ之ヲ償却スル

ニ及ハズトス若シ定限外曲者ヲシテ償却セシメント

欲スル者ハ當省ノ指令ヲ請ヒ然ル後ニ處分スヘシ

追テ來ル癸酉正月ヨリ施行可致事

九十二 同五年十一月十八日 同假規則施行ノ月日改正

先般以第三十一号訴訟入費償却定限之儀來癸酉正月

ヨリ可施行旨及布達置候處今般大陽曆御頒行相成候

ニ付テハ明治六年二月一日ヨリ可施行此旨更ニ相達

候事

九十四 同六年一月十三日 同假規則中ノ改正

先般相達候訴訟入費償却假規則之條中第二條第四條

ノ但書ニ他所ヨリ罷出ト有之候處八里以外ノ地ヨリ

罷出ト改正致候間此段更ニ相達候也

九十五 同六年五月三十一日 同假規則中増補

當省壬申第三十一号訴訟入費償却假規則中ハ左ノ通

致増補候事

一 測量繪圖認料

長三百間迄ニテ盡ル時ハ

百間ニ付一尺ノ割西ノ内一枚ニ付拾錢

長六百間迄

百間ニ付五寸ノ割西ノ内一枚ニ付十二錢

長千二百間迄

百間ニ付三寸ノ割同 十四錢

長六千間迄

百間ニ付二寸ノ割同 十七錢

長一萬二千間迄

百間ニ付一寸ノ割同 二十錢

長一萬二千間以上

百間ニ付五分ノ割同 廿四錢

一 測量ニ及ハザル見取繪圖ハ間數之長短ヲ論セス大

凡ノ見積ヲ以テ簡便ニ圖引可致事

但西ノ内一枚ニ付十錢

右之通可相心得事

布告布達沿革概略卷之一終

